

NOUVELLES

日仏会館
日仏協会 通信

No. 49

1990年3月

財団法人 日仏会館
日仏協会

東京都千代田区神田駿河台2-3
TEL. (03) 291-1141
FAX. (03) 296-0975

フランス文化講演シリーズ

「講義要旨」No. 6, (第86回 阿部良雄氏)

フランス文化を考える会の1月例会は、1月26日、日仏美術学会共催のもとに『フランス19世紀絵画とわれわれ』と題して、東京大学教授の阿部良雄氏に講演をお願いした。当夜は今冬一番といわれる厳しい冷込みにもかかわらず100名を超す聴講者が集まり、まさに堂に溢れる盛会であった。講演は二台のカラーライドを併映しつつ行われたが、その興味深い内容と要旨を同大学助手・稲賀繁美氏に依頼し以下にまとめて頂いた。

ここ20年来のフランス美術史研究の動向の中核をなす「修正主義」について批判的な総括を試みたい。~~修正主義とは~~従来19世紀を印象派の世紀と見なし、主題の消滅と絵画の自律が20世紀の抽象絵画へと予定調和的に進化する、と考える通念が存在していたが、それに再検討を加える「見直し」の謂である。その傾向を大略三別すれば、シュールレアリスムの系列、68年当時の左翼的潮流に根差すもの、および政治的にも保守的な傾向を表明する、大学・美術館関係者と、なろう。

経緯を概略すれば、まず67年、異端のシュールレアリスト、ダリがメソニエ再評価の先鞭をつけ、イマージュの復権を説く。73年には19世紀当時の代表的画家たちがパリで展覧されたが、題名どおり、その意図は『エキヴォック(曖昧)』なままだった。翌74年は学問的見地からの「見直し」が進む。まず、新古典派とロマン派との間の空位時代と思われてきた時期の再評価を果たした『ダヴィッドからドラクロワへ』展(ローザンベール監修)。また『1874年のリュクスンブル美術館』展(ラカンブル監修)が、いわゆる印象派第一回展当時の国立現代美術館の陳列を一部再構成して、印象派の革命性を傍証しようと意図しながら、結

果的には「修正」に貢献する。76年にシュールレアリスム末流の詩人ジュフロアが歴史画の復権を説き、77年の『クールベ』展は、写実主義絵画の意味作用を社会的文脈において解析しようと試みてきた、英・米左翼マルクス主義系の学者の仕事(シャピロ、クラーク、ノックリンら)に、遅れをとってきたフランス側が対抗した仮説提出作業とみなされる(トゥッサン主導)。82年には米国で前衛史観にとらわれることなく「写実主義」という枠にはまる画家を広く発掘した『写実主義の伝統』展(ワイズバーグ主導)。この間、クチュール、ジェローム、グレル、ブグロー、ヴェルネー、フランドラン、エベール、E. ドローネーなど、当時の巨匠の回顧展が、死後百周年などを機会に、しばしばフランス以外の専門家主導のもとに、商業的、学問業績のないしイデオロギー的要因を秘めつつ組織され、86年にはいよいよオルセー美術館の開幕を迎えた。また日本でも、『ル・サロンの巨匠たち、フランス絵画の精華』('89、B.フカール・池上忠次、福岡市立美術館など)、『ドラクロワとロマン主義』('89、テュイリエ・高階秀爾、国立西洋美術館)、『リヨン美術館特別展』('89、都美術館)、『19世紀ローマ賞絵画』('90、テュイリエ、渋谷区立松濤美術館)などの展観が相次いで行われた。



19世紀フランス美術像のこうした変貌を象徴する一例は、67年のアングル展では出品に値せずとされた宗教画が74年には鳴り物入りで展示されたことであろう。ボードレールの美術批評研究においても、68年の国際学会では、絵画の物語的テーマよりも、その物質性そのものから発して観者に一種生理的な作用を及ぼす色彩効

批評 標準

果に注目した点に、詩人の先見の明を認める「近代主義」的枠組みがなお支配的だったが、当時詩人が論じていた絵画の発掘が進行するにつれて、例えばアングル派の知的な絵画が長いあいだ不当に低く評価されてきたのは、詩人の偏見がその後の支配的な言説として通用したためである、とする、テルノワの批判（『フランス19世紀絵画と文学』—1972）のごときも登場するに至った。恐らく同様な理由によって等閑視されてきた19世紀宗教絵画について、81年に国家博士論文を提出したB.フカールは、パリ第4大学美術史正教授に迎えられた。

フカール

しかし、これらの事態はただちに「見直し」派の勝利を意味するものではない。³¹印象派の技法はアカデミーのエスキスを完成作に流用したに過ぎぬとするボイムの説は、「見直し」派の伝家の宝刀だが、レーベンシュテインも指摘するように、これは目的と手段を

混同した、恣意的な結果論に陥っており、またアカデミーを救済するために印象派を手段にするという循環も否定できない。また、同時代の文学にも見られる共通の逸話・主題群を手掛かりにして、従来折衷派と見做された画家までを含めてロマン主義者と命名するデュイリエの論法は、いきおい有名主義を退け、^{その}名作主義を^{その}奨める点で、それ自体アカデミーのコンクールに特有の価値観の表明であり、また有名画家の濫作を美術市場の近代化に競合したロマン主義的個人主義の現れとして社会的に理解する視点にも欠けている。抽象絵画への反動として、物語りの要素の復権が強調されるが、問題なのは、そうした知的要素の有無で黒白を評定することではなく、主題や技法をも含めて、絵画が絵画として成立する過程への画家の主体的な関与という物語りに共鳴するような、美的鑑画体験の可能性ではないだろうか。

その
その
見直しに